

形而上学の排除から復権まで

—哲学と数学・論理学の 60 年—

野家啓一 (Keiichi Noe)

東北大学教養教育院

1954年に発刊された『科学基礎論研究』の巻頭に掲げられた「創刊の辞」において、初代理事長の高木貞二（心理学）は、20世紀に入って科学の専門分化に対する転機が訪れたことを示唆し、その内実を「研究の深化による科学基礎論的反省であり、それに基づく科学全体としての連帯性の自覚であり、更にまた科学方法論的反省による数学や論理学との新しい連繋である」と要約している。

むろん背景にあるのは、19世紀末から20世紀前半にかけてフレーゲとラッセルによって推進された「論理学の革命」であり、それを基盤にウィトゲンシュタインを中心に展開された「言語論的転回」の動きである。すなわちウィトゲンシュタインによれば、「あらゆる哲学は<言語批判>」（『論理哲学論考』4.0031）にほかならない。そして論理分析の鑪にかけるならば「哲学的な事柄についてこれまで書かれてきた命題や問いは概ね、偽ではなく無意義」（同前、4.003）なのである。この伝統的哲学に対する壊滅的批判を字義通りに受け取ったのは、カルナップを領袖とする論理実証主義者たちであった。

ウィーン学団を率いたカルナップは論文「言語の論理分析による形而上学の克服」（1932）の中で、すべての形而上学的言明は論理的構文論を逸脱した疑似言明であり、「形而上学者は音楽の才能のない音楽家である」と断じた。また彼は、ウィーン学団の機関誌『認識(Erkenntnis)』創刊号に「古い論理学と新しい論理学」を寄稿し、哲学の任務を「経験科学の命題と概念の論理分析」と規定した。それによれば、論理実証主義の到達目標は「形而上学の排除」による「統一科学」の実現なのである。わが国で科学基礎論学会が呱呱の声を上げた1950年代半ばは、アメリカに亡命したカルナップを軸に再編成されたウィーン・シカゴ学派が、その最後の光芒を放っていた時期と言ってよい。しかし、その後の論理実証主義は、カルナップの薫陶を受けたクワインの論文「経験主義の二つのドグマ」（1951）および統一科学百科全書の一冊として刊行されたクーンの『科学革命の構造』（1962）によって、実質的にその命脈を絶たれたのである。

ただし、哲学運動としての論理実証主義は終焉したものの、論理分析と言語分析の方法は英語圏の哲学者を中心に着実に継承され、分析哲学として20世紀後半に目覚ましい展開を見せることになる。そこでは、いったん葬り去られた形而上学が息を吹き返し、今日では分析哲学の中心問題として復権するにいたる。その動きの中で最も重要な役割を果たしたのは、私見によれば、マイケル・ダメット

とソール・クリプキという二人の哲学者であり、彼らの仕事は数学・論理学との相互交渉なしにはありえなかった。その過程を簡単に振り返っておこう。

数学・論理学と哲学とが最も活発に切り結び、双方に啓発的な帰結をもたらしたのは、ラッセルによる集合論のパラドックスの発見に始まる 20 世紀前半の「数学基礎論論争」の時期であろう。周知のように、この論争は論理主義・直観主義、形式主義の三派鼎立の構図で展開し、少なくとも数学・論理学の領域では最終的にヒルベルトの「有限の立場」からする形式主義が勝利を収めた。直観主義の擁護者はワイルら少数にとどまり、タルスキはそれを「哲学的には弱く、数学的には醜悪である」と評したという（竹内外史『ゲーデル』1986）。

数学的に醜悪であるか否かはともかく、直観主義はダメットの反実在論を通じて哲学的には実り豊かな成果をもたらした。彼は従来の実在論／観念論という外的世界に関する認識論上の対立を、外的世界を記述する意味論の問題として捉え直し、その対立を実在論／反実在論という軸に沿って再定式化したのである。その際に枢要な役割を果たしたのが直観主義の論理であった。すなわち、二値原理（論理法則としては排中律）を維持するか放棄するかによって実在論と反実在論は袂を分かち、前者は真理条件的意味論を後者は主張可能条件的意味論を採用することになる。ダメットによれば、その結果「われわれは主観的観念論に陥ることなしに、実在論を棄てることができる」のである。これは科学の論理分析から形而上学の論理分析への第一歩であった。

直観主義と並んでもう一つ、数学・論理学から分析哲学への影響として特筆すべきは、非古典論理からの問題提起であろう。具体的は、様相論理と可能世界意味論を基盤とするクリプキの直接指示理論のことである。クリプキは『名指しと必然性』（1980）において、個体指示をめぐるフレーゲ、ラッセル、ウィトゲンシュタインらの「記述（群）理論」に反旗を翻し、必然性／可能性という様相の考察を梃子にして、可能世界を貫通する個体の同一性という問題（たとえば、鼻の低いクレオパトラはクレオパトラでありうるか、といった問題）に明快な見取り図を与えた。それは同時に、アリストテレスまで遡る伝統的な「本質主義的形而上学」を現代哲学の中に復権せしめたと言ってよい。それ以降、論理分析や言語分析の方法をもって個体と普遍、同一性と変化、必然性と可能性といった形而上学的カテゴリーを解明する分野は「分析的形而上学」ないしは端的に「形而上学」と呼ばれ、今日に至っている。

以上のような観点からこの 60 年を振り返ってみると、哲学と数学・論理学の関係は、一時期（数学基礎論論争）の蜜月関係とまではいかないものの、付かず離れずの関係を保ちつつ、哲学は数学・論理学を栄養源に新たな問題領域を切り開いてきたと言えることができる。60 年前に数学・論理学を武器に「形而上学の排除」を目指した哲学は、こんにち再び数学・論理学に依拠しつつ「形而上学の復権」を果たし、その円環を閉じようとしているかに見える。だがわれわれは、この円環を閉じることなく、スパイラルを描いて次のステージへと上昇することをこそ期待すべきであろう。